

11. 23 憲法フェスタ参加企画

自治労会館305 午後1時～4時

シネセッション

もし「憲法」を生きたいのならであるならば……

——映画「生きているうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」を観て考える——

映画「生きているうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」（森崎東監督作品 85年）

——ここでは、この列島社会の（「原発」立地地域のような）「**周辺**」部で、あるいは（沖縄のような「**周辺**」部から流れてきて、ほとんど生の「**限界**」にさらされて生きるいわゆる「**原発ジプシー**」のような、あるいは、それを相手とする「**街娼**」のような者たちの闘いがくりひろげられる。

それは、言わず語らずのうちに支え合いながら、必死に生きる者たちの営みから（警察とやくざとの癒着のように）グルになって、「**利ザヤ**」を奪う者たちとの（歴史の「**余白**」に遺棄されるシミのような）闘いである。

「生きているうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」——それは、そのような闘いを生きる者たちの言わず語らずに支え合う生き様の共同性の表現であり、その者たちの間で受け渡されていく「**アイちゃんですよォ ご飯食べたァ**」という呼びかけは、その「**党**」の「**旗**」である。

また、その「**党**」のメイン・シュプレヒコールは、「**アフレルジョーネツ、ミナギルワカサ、キョードーイッチ ダンケツ、ファイトーツ**」である。

もし、「（憲法にしたがって」でなく、「**憲法の下**」でもなく、）「**憲法を**」生きたいのであるなら、**私・たちは、どのような「党宣言」を発しなければならぬのか？どのような「旗」をかかげなければならぬのか？**

——問われているのは、なお、私・たち自身である。

●森崎 東監督作品

生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言



製作・キノシタ映画
製作協力・株田中プロモーション
配給・株田日本アートシアター・キルド
（カラー作品／ビデオビジョンサイズ）
上映時間●1時間45分



●がいせつ
この映画は一連の「女シリーズ」や「黒木太郎の愛と冒険」「時代屋の女房」等で知られる森崎東監督が、長年に渡り映画化を希望していたもので、遂にこのたび名古屋の実業家・木下茂三郎率いるキノシタ映画作品として企画を実現、完成させたものである。
内容は倍賞美津子演ずるドサ回りのストーリーパーを中心に、不良中学生とダメ教師、原登ジブシー、娼婦、ヤクザ、悪徳刑事といったいわゆる「ハミダシ人間」たちによってくり展開される混沌とした群像ドラマ。非行、原登、沖縄、人間の生死といった様々なテーマを内包しつつストーリーは驚劇でありアメリカドラマであり、青春映画でありアクションで

あり、といったように次から次へと連鎖してエネルギーあふれる見せ場をつくる。

出演は森崎東の常連である倍賞美津子に、原田芳雄、平田満、梅宮辰夫など、他に泉谷しげる、左とん平、殿山泰司、小林トシエ、乱歩寿といった個性派が共演している。娼婦のアイコには新人の上原由恵、また不良中学生（正・タマ枝・和男）を演じた三人も名古屋で公募された新人たちである。



●あらすじ
旅回りのダンサー「バーバラ」(倍賞美津子)が久し振りに名古屋に帰って来た。沖縄集落の中のタケ子(小林トシエ)が経営する飲み屋の二階が彼女の住居で、内縁の夫・宮里(原田芳雄)と親友のアイコ(上原由恵)が待っているはずである。弟の正(片石裕史)とタケ子の娘・タマ枝(竹本幸恵)、それに和男(久野真平)の不良中学生三人が修学旅行からはずされた腹いせに積立金強奪騒動を起こした直後で、人質の野呂教諭(平田満)が縛られ、物干台に転がされていた。



宮里は原登を転々と渡り歩く労働者・原登ジブシーだが、いつの間にかヤクザの仲間入りしているのが「バーバラ」には気がかり。沖縄のコザ暴動以来の間柄で、旅回りを止め二人ともカタキの仕事に就いて正式に結婚したいのだが、バーバラは宮里の顔を見るや、アイコのことを聞かずにいられない。アイコは福

井の美浜で原登労働者相手の娼婦をさせられていて、放射能タレ流し事故を知ったことからヤクザに狙われ、宮里の手引きでここへ逃げて来ている。「アイちゃんですよ、ご飯たべたア？」が挨拶のことばで、みんなに好かれていたアイコ。しかし「バーバラ」が降りつく前日、好きな安次(泉谷しげる)のいる美浜へ帰ってしまった。それを知った「バーバラ」は、宮里がヤクザに寝返ってアイコを帰したと思いつき、裏切られた気持ちで、学校をクビになった野呂を監視しつて再びドサ回りの旅に出る。学校を追われた正たちは宮里の口入れて美浜へ向かった。

原登がある所、原登労働者、手配師、風俗営業の店と女たち、それらを仕切るヤクザ、そして警察という図式は美浜とて同じ、そういう仕組の中へ戻ったアイコがどうなるか。「バーバラ」もまた美浜へと向かう……。アイコは元気があった。殺されたと思っていたアイコに会えた「バーバラ」の喜びは大変で、タマ枝を加えた三人は原登の見える浜辺で焚火を囲み、夜明けまで大宴会をくり展げる。事故で死んだという安次は、本当は原登で作業中に廃液漏れで被曝し、事故隠しの為に一計を案じ、安次を死んだことにして埋葬するが、後日、ヤクザの目を盗んで安次を墓から掘り出し、「バーバラ」と野呂をにわか仲人にして墓場で結婚式をあげる。そして二人で作った合言葉は、「あふれる情熱、みなぎる若さ」。

協同一致団結、フアイト」をみんなへの別れの挨拶とするのだった。
襲った洪をアイコと安次が急ぐ。しかし海上の一隻の船がエンジン音を響かせて近付き、銃音が轟く。アイコの着ていた白無垢が崖から舞い落ち、曇っていた空が突然一気に晴れ渡り、雨が降り出した。その時、スナックのママ・ギン子(乱歩寿)の煙を手伝っていた「バーバラ」とタマ枝、硬い表情で空を見上げる「バーバラ」。アイコはいつも自分が祝言をあげる時は日照雨が降るといつていた。アイコと安次は天国で結ばれたに違いない……。

美浜でアイコの死に遭遇した「バーバラ」や不良中学生たちは、アイコと同じ境遇にあるフイリッピン女性のマリアにもヤクザの魔の手が迫っているのを知り、力を合わせてマリアを救い出し名古屋へ戻る。そして老船長(殿山泰司)の船で沖縄を経由しフイリッピンあたりまでマリアを連れて密航しようと考えた「バーバラ」を道うように戻って来る宮里。さらにまたその宮里とマリアを追ってやって来たヤクザの戸張(小林裕侍)は、宮里にアイコ殺しの代人として自首しろという。拒否し戸張を銃で撃つ宮里。だが暫く後、宮里もまた戸張の子分に撃たれてしまう。よろよろと外に出る宮里をヤクザとつながっている鑑刑事(滝宮辰夫)が待っていた。そして遂に瀕死の宮里から銃をもち取った「バーバラ」が刑事めがけて発砲する……。

なによ死んだらそれまでよ」という意味の中団結のつもりです。
ついでにラストのカットに出て来る、「バーバラ」ですよ、ご飯たべたア?というセリフについても一言しますと、これは実際にヤクザから惨殺されたアイちゃんという実在の売春婦のアイサツの言葉です。アイちゃんから「アイちゃんですよ、ご飯たべたア?」とアイサツされた人々はフツと心があつたかくなってニッコリしたそうです。
ビール瓶の口を吹いて出る音で放射能を測定するというのが実際のことです。
この映画に出演したフイリッピンの少女が帰国する時、チャンと発音出来るようになった日本語をリヨナラにかえてスタツフに捧げたのは、「あふれる情熱、みなぎる若さ、協同一致団結、フアイト」でした。映画の中で何度か出て来るこのセリフも、実際にちっほけな田舎のキャバレーにつとめていた女の子が自分を上げますために考え出した標語なのです。
(森崎 東)

上映時のチラシより